



# 都市医師会 だより

## 札幌市医師会 「市民医療フォーラム2012」

札幌市医師会 地域社会部長 笹本洋一

平成24年11月10日（土）午後1時から、札幌市民ホールにて「市民医療フォーラム2012」を開催いたしましたので、その概要について報告します。

このフォーラムは、札幌市医師会と札幌市の共催により、札幌市民のニーズに沿った健康と医療をテーマに、障害者を含めた多くの市民に参加していただき、平成16年から開催され今年で9回目となりました。札幌聴力障害者協会の協力で手話による舞台上での同時通訳と、札幌身体障害者福祉協会「ふきのとう」の協力で、文章による要約筆記のスクリーン拡大表示を行っています。事前申し込みの段階で、今回の基調講演に小倉智昭氏の講演を予定していましたが、主催者側の都合により、演者ならびに内容を変更して行うこととなりました。当日は好天に恵まれ、会場には960名の市民の方々にお越しいただきました。

開会にあたり、札幌市医師会を代表して山光進会長、札幌市を代表して渡部正行副市長が挨拶されました。

今回のメインテーマは、「病気とともに生きる～大切なのは医療と家族の支え～」です。第1部の基調講演は札幌市医師会会長の山光進先生に、第2部の健康トーク&パネルディスカッションには3名の先生方に、それぞれ講演をお願いしました。

第1部の山光先生は「病気とともに生きる」と題して、医師としての多くの患者さんと接してきた経験をお話しされました。医師として患者さんに身体的、精神的、全人的治療が必要であることはもちろんですが、患者さん本人だけでなく、患者さんの家族や、その家族にそれぞれの物語があることを忘れてはいけなないと、話されました。進行した膵臓がんの患者さんに抗がん剤治療を行い、本人からは仕事を

家族に引継ぎできる時間ができた、奥さんからは病気の本人を中心に家族が集まれた、と感謝されたそうです。自分の夢は進行がんの患者さんを何とかして長生きさせることであると、京都のお坊さんの書いた「夢」の書を見せてお話しされました。病気は人生の一部であり、治らなくても人生に調和した治療もある。患者さんにはそれぞれ家族があり、家族にはそれぞれ物語と生活がある。家族の誰かの異変はその家族全体に影響を及ぼし、家族の接し方によって患者さんの精神状態も病状も大きな影響を受ける。自分と相手との関係が大事であり、それぞれの存在を認めて、お互いにつながっているという気持ちがあれば、病気を持っていても楽しい人生を送れると、まとめられました。

第2部では、3名の専門医による健康トーク&パネルディスカッションを行いました。

始めに、五輪橋産科婦人科小児科病院の丸山淳士先生が、「人も病気も見かけ通り」と題してお話しされました。ほとんどの病気は早く見つければ、完治する。手遅れになると本人も家族も大変である。毒キノコのスライドを示し、見分けるのは難しいが見分けることが大事である。他の人から指摘されないと自分の病気は分からないので、奥様の存在が重要である。体の外側と内側（器官）に現れることを対比させて、器官の病気を治して心の問題を癒すこと、ストレスと器官、体と心は一体となって反応すること、感情と健康、などを説明しました。見かけを治すことで中身を治すこともできる、見かけを治すと体も治る、体を変えると心も変わると、まとめられました。

続いて、北央病院院長の坂牧純夫先生が「がんとともに生きる」について講演されました。日本のがんの動向について、昭和22年の4倍くらいに増加していて高齢者ほど多い。がんの罹患率、死亡率は40歳から増え始め65歳から急増している。1990年頃から、がんになる人は増えているが死亡率は減っていて、特に男女とも胃がん、肝臓がんは減っている。がんにならないために、発がん予防が重要で、肝細胞がんや胃がん、子宮頸がんは感染が原因なので、禁煙と感染予防で男性は50%、女性は25%のがんを予防できる。もし進行がんになったら標準治療を受けるのが一般的だが、その後も継続が必要で、終末期まで継続するべきである。そのために家族と医療に携わる人の協力が必要である。まとめに本居宣長の「気は養うもので補うものではない」とお話しされました。

最後に、おおにし内科・リウマチ科クリニック院長の大西勝憲先生が「関節リウマチとともに生きる～関節の痛みをかかえながら～」について講演されました。物語風にスライドをすすめ、二人の異なる環境の女性の関節リウマチの説明をされ、関節リウマチの治療は進歩していること、日本ではすぐに専

門医に診てもらえることをお話しされました。治療の進歩により、これまで関節症状の緩和しかできなかったことが、症状の消失が可能となり、最近では関節の破壊の遅延、改善ができるようになってきたこと、早期リウマチは完治することができると話されました。最後に、関節リウマチだけでなく普段の関節の痛みをとるために、椅子に座ったままの運動をご自分で実演されご指導いただきました。

パネルディスカッションでは司会の橋本登代子さんがコーディネーターとなり、3名の先生がパネリストとして出席されました。坂牧先生が全人的苦痛を示したスライドを参考に、身体的苦痛、心理的精神的苦痛、社会的苦痛、霊的苦痛について説明されました。丸山先生は、人は他の人のために生きていて、自分に備わっている力の9割は他の人のためにある。悪魔、善魔という言葉があり、善魔は悪気が無いので歯止めがない、余計なことはしないでそばにいていいと、話されました。大西先生は、話をよく聴くことが重要で、そのうえ同意することが大事である。誰でも頭の中に解決方法があり、それを引き出すことが肝心であると続けました。坂牧先生は、チャプレンという聴くだけの職種について紹介されました。最後に、大西先生は、「病気は誰でもなる、早く自分に勇気をくれる相手を見つけることが必要」、坂牧先生は、「患者さんに寄り添う医療が必要」、丸山先生は「昭和天皇のように最後まで話を聞いてから質問する、答えるのが一番良い」とまとめて、フォーラムを終了しました。

市民医療フォーラムでは、参加された市民の方にアンケート調査を行っております。今回は708名の方に回答いただき、回答率は73.8%でした。性別では女性が62.7%、男性が35.3%でした。年代別では、60歳代が最も多く、全体の40%を占めていました。内容については、大変良いが47.2%、良いが39.4%で、併せて86.6%の方が良いと回答していました。「基調講演講師が変更になって残念でした」というご意見もありましたが、「四人四様の素晴らしい内容だった」など、大変好評な意見も多数いただきました。今後のテーマとしては、がんや糖尿病、認知症などの希望が寄せられました。これらを踏まえ、来年度もさらに多くの市民の方々に参加いただけるような企画を検討したいと思いますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。



山光 進会長



渡部正行札幌市副市長



丸山淳士先生



坂牧純夫先生



大西勝憲先生